

今回は、猫の原発性アルドステロン症(以下PHA)の診断の話です。

PHAは、猫の低カリウム血症や全身性高血圧を引き起こします。猫の低カリウム血症や全身性高血圧は比較的良く遭遇する症状ですが、PHAを疑う状況であっても、確定診断をすることは現在でも難しい状況です。現在のPHAの診断方法は、臨床兆候、低カリウム血症下での血漿アルドステロンの値、エコー検査などを組み合わせて行っています。しかしながら、両側性副腎皮質過形成の場合は、エコー検査では検出不可能な場合も多く、確定診断することが難しい場合が出てきます。人医療では、原発性アルドステロン症の確定診断は、フルドロコルチゾン抑制試験、カプトプリル負荷試験、生理食塩水負荷試験で行います。猫でもフルドロコルチゾン抑制試験は実施されており、診断に利用できる可能性もありますが、それ以上に副作用に懸念があり、利用することが困難です。人においても、高齢者ではアンギオテンシンII受容体拮抗薬であるロサルタンを代替薬として使用する場合があります。従って、著者らは、猫においてアンギオテンシンII受容体拮抗薬として認可がおりているテルミサルタンを用いて抑制試験実施し、PHA診断において有用であるかを検討しています。

以下、本論文の簡単な要約です。

目的:テルミサルタン抑制試験(以下TST)を評価すること

動物:健康な猫 10 匹と PHA を持つ猫 6 匹

デザイン:前向き研究

測定項目:血漿アルドステロン濃度、カリウム濃度、収縮期血圧(SBP)

方法:テルミサルタン1mg/kg、2mg/kg、プラセボ経口投与群に分け、経口投与する前(T0)、1時間後(T1)、1.5時間後(T1.5)に上記測定項目を測定

結果:健康な猫の年齢中央値は3歳(範囲、1~7歳)であった。健康な猫では、テルミサルタン2mg/kgを投与すると、T0と比較してT1およびT1.5でアルドステロン濃度が有意に減少した。プラセボはアルドステロン濃度に有意な影響はなかった。PHAと診断された猫では、2mg/kgのテルミサルタンを投与しても、T0と比較してT1またはT1.5のアルドステロン濃度に有意な変化はなかった。どの猫にもテルミサルタンの副作用(高カリウム血症、全身性低血圧など)は観察されなかった。

結論:経口TSTは、猫のPHAを診断するための診断検査として有望であることが示された。

サンプル数が限られていることや、健康な猫の年齢が低いことなどがlimitationとして考えられますが、副作用なく診断できるのであればとても有用だと思いました。